



1



2

## ペーター・フィッシュリ     ダヴィッド・ヴァイス

2010.9.18-12.25

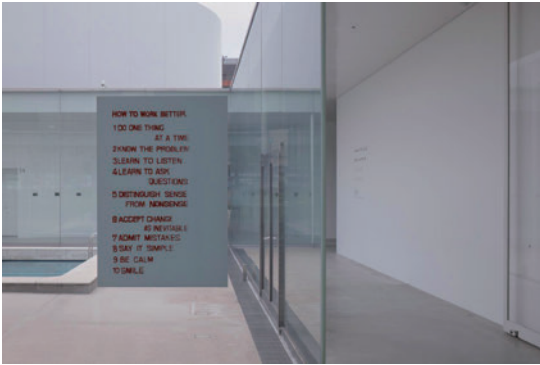
スイスを代表する美術家ペーター・フィッシュリとダヴィッド・ヴァイスのアジア初の個展は、美術館連絡協議会より3か月の海外研修助成を受け、作家への取材、制作及び展示同行、作品及び関係者調査と取材を経て実現に至った。チューリヒに生まれ育った作家を取り巻く環境及び歴史的背景に直に接することができない、また、両者は筆者の質問と希望に惜しみなく応えてくれた。主流を生み出すことを拒むアナーキズムとパンク・スピリットの姿勢を備え、世界を見つめ、問い、生きることを考える彼ら独自の美学と寓話が織りなす多重多層な神話の世界を展覧会体験に丁寧に映し出すことに主眼を置いた。

展示空間では、「LEARN TO LISTEN (人の話を聞くこと)」「SMILE (笑顔で)」など10箇条から成る《よりよく働くために》が社会を生きる問いとして鑑賞者を迎え、観る者を「問い」の深淵

へと誘う。次の作品群は、迷路、生き物、チューブ、内耳の平衡器官のような形を象った立体4点。ほぼ灰色一色で着色され、堅さや重さ等見た目から捉えることができない実体の曖昧さが観る者を惑わし、内部への興味をそそる。いよいよ展示室に入る。光と色が移ろいゆくトンネルを延々と進む大画面の映像を前に、自分自身が内部へと入り込んでいくような感覚を抱く。内部への誘いを過ぎると、約12メートルの高さの展示室にネズミとクマをモチーフとした映像作品5点が天地一帯に広がる。第一作《ゆずれない事》で、ネズミとクマは都市=商業主義社会に出て一儲けを企み失敗、美と真実の追求に突き進むも、散々な目に遭い絶望の果てに、「すべてには理由がある」と悟り、世界の秩序を独自の視点で図式化、《秩序と清潔さ》にまとめ、この本を携え旅立っていく。ネズミとク

マはさらに広大な自然の中を生き、本空間の中央の暗いケースの中で半ば標本化したかのごとく佇む。あるいは、バロック様式の宮殿、日本庭園を見つめ、眠り、空中を浮遊しながら、霧の中に消えゆく<sup>1)</sup>。

支配的な動向を見つめ疑問を呈するということは、活動当初より彼らの表現の大きな特徴であり強さである。物事を異なった観点で捉える「誤用」という手法は、卑近な素材を用いた最初の作品「ソーセージ・シリーズ」や「均衡」シリーズに顕著だ。また、これらの作品に見受けられるスケッチ的試作的行為は、即行性というフィッシュリとヴァイスの思考と制作姿勢と密に関係する<sup>2)</sup>。安価な粘土を用いた約100点の彫刻にて百科全書的世界提示する《不意に目の前が開けて》には、権力構造や支配体制に抗うフィッシュリとヴァイス流のアナーキズムが明快だ。



3



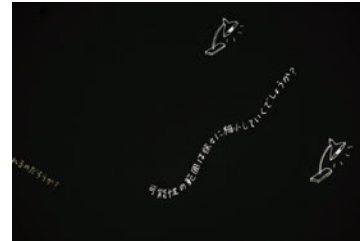
4



5



6



7

秩序や規律から逸脱し、流動的かつ混沌とした彼らの美学を提示する時、ガラス張りで透明、複数のグリッドが交差しては消滅するという複雑なSANAAの建築的特徴は有効であった。そして、作家にとって新たな展示の在り方、そして表現も誕生した。《不意に目の前が開けて》を10点程度毎にまとめ展示台に置く方法は、初の試みであった。さらに、このユニット11台が地に点在、上空を6点の《エアポート》が浮遊するという組み合わせと展開も初である。

屋外の光庭には長方形のコンクリートの塊の作品《無題（コンクリート・ランドスケープ）》が配された。雨や光、風を受け、空中の土や埃など塵が積もり、表面の色に変化を来し、作品自体が周辺の現象そのものをも映し出すこの風景作品に、柔らかな金属音が木霊する音の作品《クリン クロン》が組み合わせられた。本作品は作家が数年前から構想していたが、光庭との出会いがきっかけで完成した。この2作品は本サイト・スペシフィックな空間を記録すべく、当館に収蔵された。

そして、「クマ」と「ネズミ」がモチーフの映像作品を一堂に介した空間。個々に特有の物語があるものの、併置されることにより、「今ここ」という世界は無意識あるいは夢の世界も含めた総体として、フィッシュリとヴァイスそして私た

ちの中で新たな寓話として、あたかもネズミとクマが世界のあちこちに移動し生き続けるという思考が強く浮き彫りにされた。小さなネズミとクマが日本の庭園を巡る映像作品《庭園にて》は、数年前から構想中だったが、本展覧会のために作家が来日し、数日日本で過ごした故に完成されたものだ。

フィッシュリとヴァイスは、二人で一つの大きな自我（Big Ego）となるのではなく、小さな個の集まる共同体として、主流を生み出すことを拒むアナーキズムの姿勢を貫き、日常の大小様々な出来事を真摯な眼差しで見つめ、各々の持ち得る範囲の技術と手法で試す。結果的に、2012年4月に残念ながら逝去したダヴィッド・ヴァイス存命時に開催された最後の公立美術館個展となった。だが、彼の精神は現在も作品とともに生き、「問い」は、円形空間に鈍いシャッター音とともに次々と現れては消える《質問》のように、依然として歪曲し宙を漂い、今を生きる。

(北出智恵子)

\*1. 《正しい方向》(1982-83年)《ネズミとクマのコスチューム》(1980/2004年)《あるネズミとあるクマの映画の一部》(2008年)《無題(モバイル・ビデオ)》(2009年)《庭園にて》(2008-2010年)

\*2. ヴァイスは、マーティン・キッペンベルガーの言葉「Heute denken, morgen fertig. (今日考えて、明日には完成。)」に喩え、フィッシュリはアルテ・ボーヴェラ運動、さらに1970年代の支配構造への反発から起こったパンクの精神に喩える。(2010年9月11日、作家と筆者の会話より)

1. 手前《不意に目の前が開けて》1981/2006年  
奥《エアポート》1987年-

2. 手前《ネズミとクマのコスチューム》1980/2004年  
奥《ゆずれない事》1980-1981年

3. 《よりよく働くために》1992年

4. 《無題(コンクリート・ランドスケープ)》2010年  
《クリン クロン》2010年

5. 《無題》2000/10年

6. 「ソーセージ・シリーズ」より《ファッション・ショー》  
1997年 カラー写真  
Courtesy of the artists; Galerie Eva  
Presenhuber, Zürich; Sprüth Magers Berlin /  
London; Matthew Marks Gallery, New York

7. 《質問》2000-2010年

1-5. 7. Photo: WATANABE Osamu